

見えない危険 「電磁波汚染！」

高周波マイクロ波 脳にダメージ与える可能性が判明

日常生活で余り気にもしていない電磁波問題。生活に切り離せない電化製品などから出る超低周波の電磁波を慢性的に被曝していると癌や白血病になると言われている。夜、高圧送電線の下で蛍光灯管を手でもっているだけで明るくなるほど、高圧送電線の下では電磁波が強いことは分っている。

このような条件下では、疫学調査で小児ガンや小児白血病の発生率が高いことが判明した。1987年、米国のサビッツ博士の免疫調査で「2 mG以上の磁場で、小児白血病が1.93倍、小児筋肉腫瘍1.5倍」と調査結果が発表された。1993年、スウェーデンのアールボム博士は、北欧3国集計で「2 mG以上で、小児白血病が2.1倍、小児脳腫瘍が1.5倍」と調査結果を発表した。現在では、電磁波の影響で小児ガンを多発させるおそれがある。「電磁波と癌の因果関係」の論文は世界各国で発表されており、欧米では「電磁波は健康障害に影響がある」と考える人が大勢を占めている。

2003年2月、世界保健機構（WHO）は電磁波問題プロジェクト責任者のレパチヨリ博士は、「電磁波への予防原則の適用」を明言した。予防原則とは、

完全な科学的証明をもつことなく、何らかの予防対策をとることを言う。最近、強い電磁波を続けて被曝したことが原因の障害・電磁波過敏症になる人が増えていることは疑いようもない事実である。

「電磁波過敏症」

携帯電話の普及により、学生から主婦、ビジネスマンまで所かまわず使用している姿は街の風景の一部になっている。携帯電話に使用されている周波数の高いマイクロ波（電子レンジと同じ周波数）を長時間使用すると、脳にダメージを与える可能性が高いことが判明。電子レンジのマイクロ波は遮断してあるので問題は無いが、携帯電話はマイクロ波を遮断してしまうと電話の役目を果たせなくなる。日常使っている携帯電話は、一回の使用時間によって健康に著しく悪影響を及ぼす可能性があり、米国では長時間携帯電話を仕事で使う人が脳腫瘍になり訴訟問題に発展した。英国政府の諮問機関で携帯電話が健康に及ぼす影響を調査していた専門委員会は、科学的証拠が十分揃っていないとしながらも、携帯電話の電磁波が健康に悪影響を与える潜在的危険性を認め、成長期の子供の使用を制限すべきとの報告書を公表した。子供

は神経の発達過程にあるため、大人より電磁波の影響を受けやすいと指摘している。現在日本では、携帯電話普及のシェアで残されたマーケットが小学生、とドコモを始め各メーカーは今春小学生に対してキャンペーンを大々的に行っているが、如何なものだろうか。

コンピューターや電気製品に近づくとき、激しい頭痛、胸の苦しさ、吐き気、めまいなどの症状が出る人がいる。電気製品から少し離れるだけで症状が消えてしまうことも多いことから、電磁波の影響ではないかと考えられている。原因が電磁波そのものに反応するのか、電磁波によって他のものに反応しやすくなってしまうのかは解明されていないが、何らかの影響があると思われる。 「電気アレルギー」 「電磁波アレルギー」などを「電磁波過敏症」とも言われている。私たちは日常、家庭や会社で電気製品や電気配線に囲まれた生活をしており、ひとたび電磁波過敏症になると、普通の人が感じない微弱電磁波でも過敏な状態になり、生活に多大な支障をきたしてしまふ。電磁波が人体に影響を及ぼすと証明されたわけではないが、日常生活に支障をきたす人がいることも事実。シックハウス症候群や化学物質過敏症の方は、電磁波にも過敏反応するケースが多く見られるようだ。ディーゼル車の煤（浮遊粒子状物質）、窒素酸化物（NOx）、ホルムアルデヒドや揮発性有機化合物（VOC）などの化学物質と同様に、電磁波

にもアレルギーや化学物質化過敏症などを促進する作用があると推定されている。

「便利の副作用」

電磁波とは何か。放射線、電波、光を総称した電場、磁場が相互に共存しながら振動して伝わる波動のこと。電気が流れているところには必ず電磁波は発生する。

電磁波は低周波から高周波まで幅広く多種類あり、電波の領域のことを電磁波と呼ぶ。有害な電磁波として、「マイクロ波」「超低周波の電磁波」のことを電磁波と呼ぶことが多い。家庭などに供給される電気(交流電流)は変動する磁場である交流磁場が発生し、この交流磁場が特に有害と考えられている。周波数の50 Hz (60 Hz) の交流電流は、1秒間に50回(60回)電流の流れが反転する。この変動する電磁場「超低周波の電磁波」が問題なのだ。家電製品や送電線など、電気が流れているところに発生するのは低周波の電磁波で、特に健康に悪影響があると言われているものは「超低周波の電磁波」。これはテレビ、電子レンジ、蛍光灯、パソコンなど電気製品すべてから発生する。周波数50〜60 Hzの電流から発生する超低周波の電磁波の波長は約5000 kmと地球の半径に近い長さなのだ。遠くに伝わる性質は弱く、距離と共に急激に弱まります。テレビ放送に使っている超短波(VHF)

の波長は10 mで遠くまで伝わる。電磁波は波長や周波数が違うと性質も変わり、高圧送電線から発生する超低周波の電磁波は磁場の性質が強いので、コンクリートも突き抜けてしまい、遮断するのは困難、厄介だ。

これからの課題として、「携帯電話の長時間使用」は大問題。日頃から長電話しないように心がける必要がありそうだ。特に若年層の使用が多くなってきただけに、将来の健康が気になる。また、

「改善に力を貸したい」

日中関係について豪外相

中国にどう向き合うか。オーストラリアで日米豪の戦略対話では、それが主たるテーマの一つとなった。軍事力増強への懸念は三ヶ国に共通するが、連携を図るとはいえ、対中国でそれぞれ異なる事情を抱えている。なかでも日本は米豪から日中関係の立て直しを迫られる立場である。

「意図がよく見えないから、みな疑心暗鬼になる」。戦略対話を終えた麻生外相は、中国の軍事費急増や不透明さについて記者団にそう語った。

それでも共同声明に、「懸念」を盛り込むことを避け、中国を敵視して孤立させるよりも多国間で責任を持つてもらおう方が、地域安定につながるのと判断だ。ライス米国務長官は、日米豪三国が求めているのは、みな同じことだと繰り返し返

した。日米豪が協調して、中国を国際社会に引き込む環境づくりを進めていかなければならないとの主張だ。だが、大事な時期に隣国同士が小泉首相の靖国問題でこじれている。これでは、アジア太平洋地域の安定という共通目的の達成はおぼつかない。米豪の懸念と不満が好転しない日中関係に向くのは当然。豪州テレビのインタビューにダウナ豪外相は日中関係について「改善に力を貸したい」と語った。その米豪両国にしても、中国に向ける視線は同じではない。

日本中電気を送っている高圧送電線の「超低周波の電磁波」は遮断するのが困難だけに今後大きな問題になるのではないだろうか。目覚ましい発展で人間は便利になった反面、昔なかった病気や癌が蔓延している今日、地域環境や家内環境をもう一度見つめ直してはどうだろうか。便利な機械も使い方によっては、知らないうちに健康が害されることがあることを認識してほしい。「便利の副作用」を忘れないでください。

米国は中国と次官級の協議を重ねて、「良好な関係」と強調しているが、知的財産権や経済貿易、人権や宗教は厳しい。一方で豪州は北朝鮮の核問題への対応を例に、「中国は責任をもって行動している」と極めて好意的な評価を示している。背景には石炭などの資源とエネルギー輸出を中心に対中貿易が増え、豪州の好景気を引っ張っていることがある。